

目次

◆金賞

愛情いっぱいのもち、福島

ペンネーム 三 児 の 母 …………… 1

◆銀賞

福 島 の 郷

福島市は、住みよい都市

阿 部 勝 美 …………… 2
五十嵐 登 …………… 3

◆銅賞

まちづくりのためにできること

外国人と福島

月明かりが素晴らしいまち、福島市

藍 原 由 徒 …………… 4
菅 野 隼 人 …………… 5
松 永 翠 …………… 6

太陽はそばに

魅力あふれるこのまちのために

サイクルラック

僕が考える住みよいまち

ペンネーム 阿 部 真 結 子 …………… 7
多々見 寧 々 …………… 8
チームサギボタふぐ雑炊 …………… 9
ペンネーム ミ ス 薔 薇 …………… 10

金賞

「愛情いっぱいのもち、福島」

ペンネーム

三児の母

「ピンポーン。」

インターホンの音がして、朝から賑やかに遊んでいた子ども達が急に静かになった。誰だろう…。そう思いながら玄関の戸を開けると、ご近所さんだった。

「突然ごめんね。コロナのせいで、何だか今まで経験したことないことになった。ちゃって。学校もしばらく休校で、お母さん大変でしょう。私、近くに住んでるのに何もしてあげられないけど、ゆっくり休んでね。これよかったらどうぞ。」

と、小さな紙袋をくれた。中には紅茶とおいしそうなお菓子が入っていた。その優しさで疲れていた心が一気に温まり、涙があふれそうになった。

今年三月、コロナウイルスが流行し、子ども達の突然の休校。突如、今まで経験したことのない生活が始まった。どこへも出

かけられず、友達にも会えず、先の見えない日々に子ども達はもちろん、母である私も心身共に疲れていた。そんな時、近所の方の暖かさにふれ、とても元気が出て、感謝の気持ちでいっぱいになった。

最近、ご近所付き合いや町内会の集まりなど、地域の繋がりが薄れていたり、関わりを持たない人が増えていると聞く。しかし、近所の方と挨拶を交わしたり、他愛もない話をするだけで、温かな気持ちになったり、元気がでたりする。私はこれからも、近所の方と交流をもち、この先何かあった時、今度は私が近所の方を助けてあげたいと強く思った。

まもなく震災から十年を迎えようとしている。何が起きるか分からない世の中。そんな時代だからこそ、これからも助け合いながら穏やかで温かな福島らしい街を守っていききたい。福島には優しくて温かな人がたくさんいる。これからも、いつまでも愛情あふれるまちであってほしいと心から願う。

銀賞

「福島郷」

阿部 勝美

私は現在六十一歳、遥か遠くに見えていた還暦の丘を越えてしまいました。私は今迄福島郷の地を離れ生活した事がありません。いつものように朝日が昇り、夕には家の裏の吾妻連山へ日が沈みます。この福島郷の地は、数々の変遷を遂げながら、自然豊かに私たちの心身を育み成長させてくれました。地域の伝統文化、教育、人との関わりは、特に住みよいまちづくりの根本ではないでしょうか。少子、高齢化問題も課題ですが、育児中の母親が、SOSを発信できるヘルパー施設の整備拡充等、安心して子育て出来る環境作りが今以上必須です。また、通学路についてもガードレールが設置されていれば、と思う危険箇所も未だ見受けられます。そして私が幼少期の頃のように気軽に挨拶声掛け出来る日々になつて欲しいと思います。高齢化も長寿社会として喜ばしい事です、問題も蓄積していま

す。介護の充実、携わる方々にもっと光を当て、やりがいのある職種となつて欲しいです。

銀賞

「福島市は、住みよい都市」

五十嵐

登

福島市民憲章は、理想とした定めである。近隣との挨拶はもちろんのこと、昨今の災害発生での協力、それにコロナ禍での協力も必要であり、地域での協力がもつとも必要であると思う。

人間は一人では生活できないので、協働での理念がどうしても必要不可欠である。そのためにも町内会加入を促進することが先決である。かつての隣組制度の復活ができればと思う。

例えばマンションの管理組合のような組織ができればベターである。われわれ市民が協力の精神をもって、「福島市に住んでよかった」、「住むなら福島市」といわれるようになれば、いちばんである。

私も福島市に住んで五四年になるが、第二の故里になった。居住の自由はあるものの福島市は、すばらしい都市であることを痛感している次第である。

銅賞

「まちづくりのためにできること」

藍原 由 徒

私は、短期大学で福島学という講義を履修した。福島学では四、五人の班になり、SDGsと福島の課題を掛け合わせて自分たちができるアクションを計画・実行した。

福島学が終了した後も、私はどうしたら福島市の役に立てるのかを考えていた。そんなとき、このコンクールのチラシを見つけ、憲章の五つの呼び掛けを知った。

それらは全て、「まちをつくりましょう」という言葉で締めくくられていた。

第七版新明解国語辞典によると「まち」には三つの意味がある。そのうちの一つは、「行政単位としての市・区をいくつかの区画に細分化した一つひとつの地域」である。

このことから、「まち」を市内の小さなコミュニティのことだと考えると、私の所属する「まち」に挙げられるのは家族、友人、学校、福島駅利用者などである。これらの「まち」を少しずつ改善していくこ

とで、私も「まちづくり」に貢献できると考える。

まちづくりには自分だけでなく、周りの人の協力が必要になる。日々の行いを改めて、信頼される人になっていきたい。

銅賞

「外国人と福島」

菅野隼人

外国人が住んでいるという。彼らにこの土地に暮らすためのルールをやさしい日本語で教え、夢を共有できたら、福島は活動的でより豊かな街になると思う。

福島で、日本人と中国人の文化交流をする会の活動に参加していたことがあった。私は主に、日本語教室で日本語教師をしていた。

生徒は学生から社会人まで幅広く、教室には活気があった。ある中国人学生は、日本で美容師になる夢を持っていて、日本語の学習を頑張っていた。

教室での彼は、元気いっぱい、質問もたくさんしていた。しかし、彼は帰国してしまった。

会での交流はあったが、教室の外での、福島に住む人々との交流はあったのだろうかと思った。彼がもし、近所の人と会話ができ、美容関係の人と知り合いにでもなれたら、彼にはまだ福島にいる理由があったのかもしれない。

日本語が拙い外国人と話すことは大変なのかもしれない。福島市には、約二十人の

銅賞

「月明かりが

素晴らしいまち、福島市」

松 永 翠

福島市の夜を照らす月明かりは特別です。豊かな自然、澄んだ空気のなかを通る福島市の月明かりは、道行く仕事帰りの方、学生アルバイトの方など、多くの方に、

「今日も一日お疲れ様。」

と語りかけているように感じます。

月明かりが素晴らしいまちとは、私の考える住みよいまちです。

私は今春、日本を代表する大都市、横浜から引っこしてきました。半年が経った今、私は大都市では見ることができない、素敵な月明かりを毎日見ることができて幸せです。月明かりが素晴らしい町に暮らすことができていることに感謝し、福島市の月明かりは素晴らしいということを多くの市民の方に自覚していただけるよう、私はその素晴らしさを伝えていこうと思います。

「太陽はそばに」

阿部 真結子

がらも、満足げな息子の顔に思わず頬が緩んだ。

保育園の迎えの帰り、走り慣れた田舎道を進む。古い造りの平屋。背中を丸めたしわくちや顔のおばあちゃん。薄汚れたレジ袋に詰め込まれた大量の胡瓜。「クズだから」と言う割に、お野菜選手権でノミネートされたそれらは、勲章である土まで落とされ金メダル並みに輝いていた。遠慮しながらも家にあがると、年季の入った長テーブルと家主の高座椅子。暫くしてコックが冷えたトマトを切って出してくれた。いや、切っておいたトマトを出してくれたのかな、なんて考える。ご馳走を頬張る息子を見ながら笑い合うその空間は、まるで朝日のように温かい色味を帯びていた。

なんて店泣かせな客だろうか。トマトバーを無銭飲食で食べ尽くし、そのうえ意地汚く次のご馳走を店主にねだっている。が、彼女は終始笑っている。

帰り道吾妻山に沈む夕日に眉をひそめな

「魅力あふれるこのまちのために」

多々見 寧々

近年、都市開発が進み日本中で木々が伐採されていますが、自然な緑を身近に残したまま豊かに栄えるまち並みは、福島市の最大の魅力の一つです。

そんな魅力あふれるこのまちをさらに住みよくするために、できることを三つ考えました。

一つ目は、街灯を増やすことです。夜は静かで落ち着きがありますが、女性目線では夜間の一人歩きや、留守中の空き巣など防犯面で不安があります。そこで、まちに明かりを灯し、犯罪の抑止力につなげることで、一人暮らしの女性でも安心して生活することができそうです。また、最近ではソーラー電池や人感センサーなどエネルギー資源に配慮した製品もあるため、各家庭でも家の外に街灯設置の協力を呼びかけるなど、市としての取り組みをお願いしたいです。

二つ目は、公共交通機関を充実させることです。都市部に人が流れ、地方の過疎化が問題視されていますが、所得の低い若者層が田舎で車を持たずに便利に暮らすことができれば、UJイターンなどで都市部から地方に定着する人口は増えるはずです。そこでバスや電車、タクシーなど移動手段の充実を図る目的であるMaasの導入も進められると思います。

三つ目は、身近に文化を感じることです。古関裕而の作曲した歌を一日の節目にながちな時間帯にまちなかに流すのはどうでしょうか。私が以前住んでいたまちでは、七時十二時十七時に三回まちのなかに時報のように音楽が流れていました。時間の流れと共にほんわかとしたメロディーを感じられる毎日はとても心地よいです。また、市外からいらつしやる観光客などにも、PRとして効果的だと思います。福島市で生まれ育つ子どもたちやここで暮らす私達の記憶にも誇るべき文化として古関裕而はこれから生き続けるでしょう。

まちづくりに最も重要なのは、綿密な計画や最先端の技術ではなくこのまちで暮ら

しを営む私たち市民の多様な「感性」です。住みよいまちとは、ひとの数だけ無数に存在します。市役所と市民、どちらか一方だけの想いではなし得ないからこそ、「福島市民憲章」の精神が日常生活やまちづくりで活かされていくように、私自身、日々の生活の中で気付きや発見を大切にしたいと思います。

「サイクルラック」

ペンネーム

チームサギポタふぐ雑炊

スポーツ自転車をお持ちでない方には馴染みのない言葉かもしれませんが、自転車をかけて置いておくための物です。

スタンドはないの？実はスポーツ自転車は、軽量化のためにスタンドが無いのが一般的なのです。

お店に寄る際は、壁に立てかけるしかありません。

少し躊躇してしまいますが、サイクルラックがあると安心して利用できます。

私はチームサギポタという自転車愛好会に所属しておりまして、福島市を中心に賛同いただいた様々なお店にサイクルラックの無償寄贈を行っています。

健康のためにサイクリングをしてみよう、サイクルラックがあるお店にちょっと寄ってみよう、少し遠くのあの店にもあるぞ。行ってみよう。

そういう方々が増えればとても嬉しく思います。

小さな活動ですが、それが大きなうねりとなって、みんなが笑顔になる。

それが私の住みよい町です。

自転車で巡る、空も水もきれいな、みどりのまち。みんなで作っていきましょう。

「僕が考える住みよいまち」

ペンネーム

ミス 薔薇

コロナ禍での外出自粛要請がずっと続かないかなあ…と願っていた。人が嫌いな僕にとって快適この上ない生活だった。

あの震災後に「絆」という言葉があふれた。気持ち悪いと思った。怖いとも思った。それに比べて「ソーシャルディスタンス」は素敵だ。人との間に物理的じゃなく心の距離も取りたいほど。僕は今までケータイやスマホを持ったことがない。できるだけ人とのつながりを絶ちたいのだ。隣に住んでいる人の顔も知らない、という生活に憧れる。

さて、福島市民憲章はこんな僕にとって住みやすく希望にみちたまちなのか。「みどり」「文化を尊ぶ」「安全で健康な」まちは良いまちだと思う。「楽しく働けるまち」は良いけど「力をあわせて」が少し怖い。労働組合盛んな時代背景か。一番不安なの

が「親切で愛情あふれる」まち。関わりを持たないことが親切となることもあるんだと、多様性を認めるまちになってほしい。